



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ある行為の可能性を備える環境の捉え直しと そのきっかけとなりうる一語発話 : 〔知覚-行為〕との関連でみる発話の効果
Author(s)	名塩, 征史
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 65, 13-35
Issue Date	2013-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53597
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_nashio.pdf



ある行為の可能性を備える環境の捉え直しと そのきっかけとなりうる一語発話

——〔知覚-行為〕との関連でみる発話の効果——

名 塩 征 史

1. はじめに

1.1 背景と目的

近年の会話研究では、非言語的な要素（発話に伴う身ぶりや視線など）と言語の共起／共同を前提とし、発話を〔言語＋非言語〕の総体として捉えるマルチモーダル分析が盛んに行われ、また発話時の状況や会話参加者の社会的／文化的背景などの影響を考慮する社会学的、人類学的な視点も取り入れられている¹。語用論的な会話研究も例外ではなく、その射程は広がり続けている。そうした包括的なアプローチの採用に伴い、会話研究における言語への注目度は、以前ほど独占的なものではなくなってきた。しかし、我々の日常的な会話活動において言語は、やはり他者との繋がりを築く会話の基調であり、また少なくとも、我々は言語を話さずにはいられない。発話は、会話の場を満たす様々な事物事象とどのような機能的関連を築きながら、我々の相互行為（マルチモーダルで間主観的／相互主体的な行為）の実現にどのように、どの程度貢献しうるのか。今求められるのは、決して言語を過信せず、会話の場を満たす多種多様な事象の一つとして発話を捉える視点から、相互行為における発話について改めて問い直すことである。

本稿の目的は、上記のような問題意識を踏まえ、生態心理学（ecological psychology）における知見を援用した分析と考察により、会話活動の場における発話の意味、機能、効果について語り直すことにある。生態心理学の焦点は、「世界との切り結び（encountering the world）」（Reed, 1996）にあり、その中心課題は、多種多様な行為を実践する主体性を備えた我々人間や動物（主体／有機体）と周囲の環境との間で、どのような関わり合いが起こっているのか、我々主体が自己の心と体をどのように駆使して、変化し続ける環境の内部に自分の道を切り開くのか、ということを考え記述することである。（cf. Gibson, 1966/1983；Swenson & Turvey,

1 Duranti (ed.) (2004)、および相互作用のマルチモーダル分析に関する論文を特集した『社会言語科学』第14巻第1号（片岡（2011）などを掲載）を参照。

1991；E. Gibson, 1994；Reed, 1996）。本稿でも、我々の日常的な会話活動を、自らの主体的な行為の実践によって直接的に「環境について知り、環境と切り結ぶ」というエコロジカルな営為として捉え直すことを目指す。

以下、1.2で紹介する具体的な会話データを観察・分析することで、次の3点について検証・考察する。

第一に、会話の場で実践される活動のダイナミクスを、その場の環境、具体的には、その場に配置されたヒトとモノの位置関係の変化に関連するものとして記述する。(相互)行為の実践は、その場に何があるか、それがどこにあるかといった配置によって直接制限され、また、それで何ができるのかという特定の「ヒト-モノ」間に固有の可能性とも関連すると考えられる。第2章では、生態心理学の主要な概念である「(直接)知覚」について概観し、続く第3章ではその概念を軸に会話活動のダイナミクスと、ヒトとモノの配置との関連を具体的な事例の中で確認する。

第二に、ヒトとモノの配置とその変化を基盤とするダイナミックな活動の実践において、発話がどのような役割を果たしているのかについて考察する。まず第3章では、会話中にその会話の内容とは無関係の活動が新たに開始される際の一語発話に注目し、続く第4章では、並行する二つの活動が交錯した状態で行われた一語発話に注目する。そして、それらの発話が周囲の配置にある活動の実現に適した環境として捉え直すきっかけとなっていることを示す。

そして第三に、本稿が提唱する発話の効果、すなわち、ある発話が周囲の配置にある活動の実現に適した環境として捉え直すことを促す効果についての議論が、社会語用論的な見解、具体的には Mey (2001) の「語用実践行為」に関する記述に整合し、同書の議論が経験主義的、微視的手法からも支持されることを示す(第5章)。同時に、生態心理学におけるもう一つの主要概念である「アフォーダンス」との関連を示唆し、生態学的な視点から発話と行為の関係を問い直す。

1.2 本稿の射程：具体的なデータから見える会話の場

本稿の第3章と第4章での議論は、ビデオカメラで収録した具体的な会話場面の観察と分析をもとに進められる。本稿で用いる会話データの詳細は表1の通りである。

データの収録は、調査者（本稿の筆者）が設定した日時と場所に参加者を集めて行った。表1に記した活動環境は、基本的には調査者側が設定したものであるため、この会話データの収録は、半ば実験的環境で行われたものと言える。ただし、表1の「活動の内容」に記したものの以外に、参加者に課せられた制限はなく、活動中の飲食や携帯電話によるメールの送受信、一時的な退室なども許されている。尚、収録中、調査者は、ビデオカメラを固定した上で退室しているため、活動中に調査者から参加者に対して指示が出されることはない。

第3章以降の各図で確認できるように、活動中の参加者はテーブルを囲むように配置された

表1 会話データの詳細

参与者	人数構成	3～4名一組
	年齢	20歳台から30歳台後半までの大学学部生、大学院生、専門学校生
	関係	友人同士／親しい先輩―後輩
活動の内容		「一時間を楽しく過ごす」という指示のみで、特別な活動の設定はなし。
収録時間		約60分
環境	主なモノ	テーブル、椅子、菓子類、飲み物(インスタント／ペットボトル)、電気ケトル、簡易食器類(紙コップや紙皿など)
	配置	各図を参照

椅子に座っている。テーブルの上には多種多様なモノが配置されており、各参与者は他の参与者と向き合うだけでなく、テーブル上のモノに手を伸ばしたり、言及したり、様々なやり方で注意を向け利用することとなる。すなわち、当該データは、〔自己-他者-モノ〕の「三項関係相互行為 (triadic interaction)」(Reed, 1996；以下、三項行為) であると言える (2.2で詳述)。

また、当該データは本稿における議論の射程を自ずと制限するものでもある。つまり、本稿での「会話 (活動) の場」とは、当該データの収録に当たって調査者によって整えられた物理的な環境 (部屋、ヒト、モノ) の中で一時間を自由に過ごす状況 (situation) のことであり、一種の理想化された場とも言えるだろう。本稿での議論はこのデータから観察可能な出来事を軸に進められることになる。もちろん、このようなミクロな活動の場においても、マクロ社会文化的な影響を無視することはできない。会話の場に集う各行為主体はある社会／文化の一構成員であり、そうしたマクロな共同体全体の社会的諸条件を反映する者として (概ね) 躰けられた (bred) 存在である (Mey, 2001)。しかし、本稿が対象とする会話の場における各振る舞いに直接影響を及ぼすのは、上記のような意味で社会的な主体が個々に有する〈認知〉であり、本稿のデータから見受けられる社会性は〈社会についての個々の認知〉である。本稿の議論は、この〈認知〉とよりマクロな視点から捉えた〈社会〉との関連にまでは及ばないが、データの中で観察される各主体の活動も少なからず〈認知を介した社会性〉の影響下にあることを前提とする²。

2 本稿で使用する「認知」は、各主体に固有の経験や学び、記憶、信念等によって構成され、周囲の事物事象を解釈する上での基盤／指標となるものを指す。この認知には「今、何が起きているか／どのような状況か」といった現状の把握も含まれるが、そうした現状把握を特に「認識」と表記する。

2. 会話活動における〔知覚-行為〕

2.1 生態学的な知覚

前章でも述べたように、本稿における分析と考察は、生態心理学における議論を参考にする
ことで、会話研究に新たな視点を取り込む試みでもある。ここでは、本稿が特に注目する生態
学的な「知覚 (perception)」について、Gibson (1966/1983 ; 1979/1986)、Reed (1996)、三嶋
(2000) などの記述に依拠し、説明する。

我々は、身体的全般的定位に関わる「基礎定位システム」を基に《見る》、《聴く》、《触る》、
《嗅ぐ》、《味わう》といった行動様式を伴う各探索システムを様々に組み合わせ働かせること
で、周囲の環境に実在する事物／事象から能動的・直接的に情報をピックアップしている³。た
とえば、歩き疲れた主体は、どこかに座ろうとして、周囲の環境内に座れる場所を探すだろう。
やがて適度な高さや適度に柔らかい上面を備え、且つ自らの体重を支えるのに十分な耐久性を
持つある場所／モノに気づき、その場所／モノの性質を利用することで「座る」行為を実現す
る。このように、あらゆる主体の能動的な行為に利用可能な情報を周囲の環境から探索・抽出・
獲得する活動を「知覚 (perception)」と呼ぶ。知覚は、能動的な行為と不可分な関係にある。
知覚された情報をもとに行なわれた行為が、その効果として環境を変容させ新たな情報を生み
出し、その情報の知覚がさらに次なる行為の調整に利用される。「情報が行為をコントロールし、
行為が情報をコントロールする」(三嶋、2000 : 181) といった場において、知覚による情報の
ピックアップは行為の実践に不可欠であると同時に、その継続には行為の実践を必要とする。
先の「座る」行為の例で言えば、実際に座ることで、その場所／モノが傾いたり、柔らかすぎ
ることなどが判明すれば、その情報が「立ち上がる」という次なる行為の調整に利用されるこ
とだろう。この他にも、「動物も人間も、運動のちょうど止み間ではなくて、実際は移動中に
環境を見る」(Gibson, 1979/1986) という移動視、また、何かを掴む、持つ、振る、回す、など
の行為に伴い得られるフィードバックを知覚し、そのモノの大きさや重さなどを触知する「ダ
イナミック・タッチ (Dynamic touch)」(cf. Gibson, 1966/1983 ; Turvey, 1996 ; 三嶋、2001)
などの事実は、この〔知覚-行為〕のサイクルを実証する事例であると言える。

現実の会話活動の中で起こる何気ない周囲の環境との切り結びは、極めて即時的／即応的な
活動であるように見受けられる⁴。そうした観察の事実との整合性を考えれば、周囲の刺激／情
報から論理的な推論過程を経て一つの意味を見出すといったような間接的な手続きを前提とし
ない生態学的な「直接知覚」は、会話活動を分析・記述する上では無視しがたい概念であると

3 Gibson(1966 : 49)によれば、各知覚システムの様式は意識的な質の様式ではなく、活動の様式で分類され、
知覚は一般的に「五感」と呼ばれるような感覚作用からは区別されるものである。

4 認知科学において、認知をコンピュータメタファーを用いて捉えることに疑問を投げ、創発認知的アプロ
ーチの有用性を訴える鈴木 (2004 : 46-47) にも同様の記述が見られる。

言える。本稿が生態心理学から〔知覚-行為〕の概念を援用する理由は、まさにこの点にある。会話の基調とも言える発話文の解釈には Sperber & Wilson (1995) で説明されるような推論過程が必要であることは否めない。しかし、各主体はそうした言語的なやり取りに並行して、周囲の（物理的な）環境の変化にも（身体的に）対応しなければならない。会話活動をその場の環境まるごと包括的に論じる上では、言語的な相互作用を支える認知語用論的なメカニズムだけでなく、環境と主体との切り結びを支える〔知覚-行為〕のダイナミクスの存在を認め、両者の体系的／機能的関連を探ることが肝要である。

2.2 環境の配置：ヒトとモノの位置関係

上述のような意味で、環境は主体の〔知覚-行為〕を多様な可能性へと開き、時には制限する存在であると言えるだろう。ここで言う環境とは、主体の周囲に実在する多種多様な事物事象によって構成された、いわゆる物理的な（知覚可能な）環境を指す。環境を構成する各事物事象は互いに関連し合い、特定し合う関係にあり、そうした相互依存的な環境の中に埋め込まれた状態で初めてその意味機能が発現することになる。この環境は、文化的、社会的、教育的背景やそれらに関する学び、経験、記憶等を含む〈認知〉とは（便宜的に）切り離して考えるが、先述の通り、両者は無関係ではない。Reed (1996) によれば、「知覚的意識は、…知覚する人の年齢に依存しており、どのくらいうまく知覚することを学習しているか、どのくらい強く知覚することに動機づけられているかによる」（細田訳：61）のであり、知覚はあくまで各主体に固有のものである。そうした知覚の主観的・個別的側面に起因して、同じ環境であっても、各主体が知覚する行為の可能性は、互いに常に同一のものであるとは限らない。しかし、そうした不可避な個別性にもかかわらず、自己と他者が同じ行為の可能性を知覚した時、互いの〔知覚-行為〕は同調し、身体的な協応関係が組織化される。本稿で扱う会話のような相互行為の実現は、こうした各主体に固有の知覚がどのように共同しうるかということに基礎づけられているのだが、この知覚の個別性や主体間での類似性は、まさに各主体における文化的、社会的、教育的背景の個別性と類似性に関連するものであると本稿では考える。換言すれば、同じ文化／社会で〔知覚-行為〕を継続してきた主体間であれば、ある環境から同じ行為の可能性を知覚できるが、上述のような個別性に起因する機微なズレが時には主体間の活動に何らかのぎこちなさをもたらすことも考えられる。特に不慣れな環境や初対面の他者を相手どる場合などは、そうしたリスクを考慮し、互いの認知を確認し合う試行錯誤的な交渉が必要となるだろう。先にも述べた通り、会話活動には環境に対して直接的な〔知覚-行為〕と推論を必要とする言語的な交渉が混在しているのである。各主体の認知は本稿におけるデータからは見えにくいいため、便宜上、知覚可能な環境に観察と分析の焦点を絞ることから始めるが、この手続きは環境から行為の可能性を知覚する探索的な活動に各主体の認知的基盤が関連する可能性を否定するものではないことに注意されたい。

本稿では特に、環境を構成する具体的なヒトとモノの位置関係に注目する。ここでのヒトとは、(三項) 相互行為の参与者であり、〔知覚-行為〕の主体である。また相互行為の場には複数のヒトが存在するため、あるヒトにとっては、他のヒトが知覚の対象ともなりうる。一方でモノとは、知覚の対象とはなっても主体とはなりえない存在である。既述のとおり、モノには潜在的に行為の可能性が備えられており、あるモノの存在は、あるヒトに対して、ある行為を可能にする。ヒトが知覚の対象となる場合には、ヒトの「モノ的側面」が際立つことになるだろう。他者として捉えられるヒトは「モノ的なヒト」であり、その意味で、他者はモノと同様の意味をも有すると考えられる。本稿が分析の対象とする三項行為では、モノ中心の遂行フレームとヒト（他者）中心の相互行為フレームが同時に、もしくは状況に応じて即座に切り替えられる。遂行フレームで捉える行為とは、ヒトがモノ（もしくはモノ的ヒト）に対して一方的に主体性を発揮し、環境に何らかの変化をもたらすものである。一方、相互行為フレームで捉える行為とは、複数のヒトが相互に自己の主体性を発揮し、互いの振る舞いに応じて適切に自己の在り方を調整しつつ行われるものである。相互行為フレームでは、遂行フレームとは異なり、相手の思考を予測／推論／確認しつつ行われるため、言語の貢献度がより高くなると言えるだろう。

次章以降では、こうした行為フレームの切り替えや組み替えといった会話の場のダイナミクスが上述のようなヒトとモノの位置関係、およびその変容に関連していることを具体的な事例の分析をもって示し、そのダイナミックな行為過程に対して、発話がどのように、どの程度関連し機能しているのかについて考察する。

3. 発話による活動の開始

3.1 会話活動のダイナミクス

2.2でも述べたように、三項行為は、モノ中心の遂行フレームとヒト中心の相互行為フレームが同時に、もしくは即座に切り替えられるようにして展開される。遂行フレームにおける複数の行為がその対象物であるモノを接点として接触するとき、もしくは、相互行為フレームにおける活動に参与する複数の参与者が共通のモノに注意を向けるとき、そこには三項行為へと発展する可能性が生まれる。三項行為フレームでの、こうしたモノを接点とする行為の接触は、各参与者の知覚がモノからモノへ推移する知覚主体のダイナミクスと、各参与者の知覚可能域内にモノが現れ、移動したり、変化したり、その存在が取り立てられたりする知覚対象のダイナミクスが接触することでもある。以下では、会話事例(1)の観察と分析を通して、遂行、相互行為、三項行為といったフレームの切り替わりに注目しつつ、会話の場のダイナミクスとヒトとモノの配置との関連について見てみよう。

(1)はグループ I（参与者 A、B、C）の会話であり、参与者たちは B が以前食べたケーキを

話題に話している。この時、Aの右手には電気ケトルが置いてある。

(1)グループ I：ケーキの名前

- 01 B： なんだっけ名前忘れちゃった。
02 [なんかふつー
03 C： [ガトーショコラじゃないの？
04 お湯。[(紙コップをBの前に置く)
05 B： [(Cの紙コップを目で追う) @@ (→C) お湯@
06 A： [(Cのコップを自分の前へ持ってくる)
07 B： [(コップを目で追いながら) ガトーショコラじゃない。
08 なんかにそれじゃなくて、なんか、フワッフワしてるやつあるじゃん。なんか。
09 C： [あー。
10 A： [(コップにお湯を注ぐ) シフォンケーキ？
11 C： んー [ー。
12 B： [んん、(→A →コップ)
13 A： じゃなく [て？(コップを再びBの前に戻す)
14 B： [(コップを目で追いながら) ちがうちがう、
15 クッキーな、っぽいんだけどー、[みたいな。
16 C： [(コップを取って、自分の前へ)
17 B： 名前なんだっけ。

(1)は全体的に見て、参与者全員が同じ話題について概ね均等に発話を行っており、三者間での会話が問題なく成立していると見てよいだろう。しかし、この場で起こっている活動はそうした会話だけではない。4行目でCが自分の紙コップをAに向けて差し出すようにBの前に置き、「お湯」とだけ発話する。この発話の直後にAは、Cのコップを自分の手元に持ってきてお湯を注ぎ（7行目）、それをCに返すために再びBの前に置く（13行目）。この「お湯を注ぐ」という活動は、AとCの行為が同調的に機能することで実現するものであるが、ABC三者間での会話の内容とは全く無関係の別の活動であると考えられる。

この4-14行目のAC間のやり取りは、受け渡される紙コップを巡る三項行為として見ることができる。この三項行為は、それまではCとの間に閉じた遂行フレーム内における「飲む」という行為の一部でしかなかった紙コップが、4行目のCの振る舞いによって取り立てられ（図1）、他者との共同注意（以下、同義で「相互知覚」）が可能になったことが起点となり開始されている。つまり、参与者間で共有された知覚可能域における紙コップというモノの際立ちが、[C-紙コップ]の行為から[A-紙コップ-C]の三項行為への展開をもたらしている。

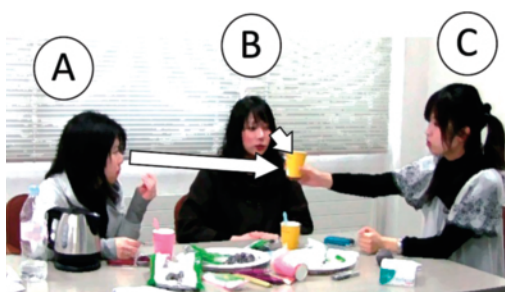


図 1 : (1) 4 行目



図 2 : (1) 5 行目



図 3 : (1) 7 行目



図 4 : (1) 12-13 行目—①



図 5 : (1) 12-13 行目—②

ここでもう一点、注目すべきは、この活動に明確な遂行性を持って参与しようとはしていない B の振る舞いである。B は、4 行目の C の発話に対して 5 行目で一瞬反応を見せるが、それ以降は、一切この AC 間の「お湯を注ぐ」活動に言及することはない。しかし、図 1—5 を見てもわかる通り、B は会話を続けながらも、A と C の間を往来する紙コップの動きをずっと目で追っている（5 行目、7 行目、12-13 行目）。つまり B は、この自分と隣接する他の活動を意識しながら（その活動との接触の可能性を完全には否定できないまま）、自らの行為（発話）を制御しているということになる。このような B の振る舞いは、AC と同じ対象物（紙コップ）を巡るものではあるが、「お湯を注ぐ」三項行為を行なう A や C の振る舞いと同様に捉えられるものではない。なぜなら、この時の B の振る舞いは、「お湯を注ぐ」という活動を創出するものではなく、接触を避けることでその創出を妨げないようにするものだからである。むしろ A と C の間を往来する紙コップという、B の知覚可能域内で変化するモノとの間で制御された行為、

すなわち、〔B-紙コップ (の往来)〕という遂行フレームにおいて解釈すべき行為であると考えられる。

ここまでの分析からわかるように、4行目のCの振る舞いによって取り立てられた紙コップ、そしてそれに対する三者間での相互知覚は、結果としてABC三者間の会話と並行するもう一つの活動として、AC間には「お湯を注ぐ」という三項行為を、BにはAC間の三項行為への接触を避けるために、移動する紙コップとの距離を保つという行為をもたらしした。この現象は、会話の場に起こるモノの変化（際立ち、移動など）が、主体と環境との切り結びの様相、ひいては各主体が関わる活動／行為フレームの組み合わせに変化をもたらすことを示している。また、少し視野を広げてみると、その場のヒトとモノの配置が、参与者間の活動を幾分制限していることにも気づくだろう。(1)の事例では、紙コップの移動以外にも、各参与者と電気ケトルの配置がその場の展開にとって前提的な基盤となっている。たとえば、BがAC間の「お湯を注ぐ」三項行為に参加しないのは、電気ケトル（お湯）がAだけが手の届く範囲に配置されていることや、AとCとの距離が、Bの介入を必要としない程度に近いことと深く関わっている。そうした配置ゆえに、4行目のCの振る舞いはAに向けて繰り出され（そしてAにもそのように解釈され）、その直後に紙コップがBの目の前に置かれたにも関わらず、Bはそれに手を伸ばすことはおろか、上体を近づけることすらしない。各参与者は、こうした前提的な配置を基盤として、自らの視座から一つ一つのモノを知覚する。ある者には「飲む」ことを、ある者には「お湯を注ぐ」ことを、またある者には「回避する」ことを予期させる紙コップが他のモノと動的に関連しながら、その場の環境が複雑に、絶妙に組織化され、更新されてゆく。そうした環境の流動に伴い、複数の行為フレームが組み合わされた複雑な活動システムが築かれては消えてゆく。それこそが会話活動の場のダイナミクスであると言えるだろう。

3.2 環境を捉え直すきっかけとしての発話

ここで(1)の4行目の発話「お湯」に注目してみたい。この発話は前節で指摘した「お湯を注ぐ」という一連の活動を支える行為フレームの切り替えの起点に位置する発話であり、事実、AとBはこの発話の直後から「お湯を注ぐ」活動を志向する動きを開始している。しかし、たった一語で「お湯」を言及指示しているに過ぎない、限られた言語情報しか持たない発話がこの複雑な相互行為の実践に、果たしてどの程度貢献していると言えるのだろうか。

発話という行為は、生態学的な知覚によっても、言語的解釈によっても利用可能であるが、当然獲得される情報の質は異なるものである。当該発話に伴うCの発声を聞き、Cの視線や紙コップを高く掲げる振る舞いを見するという直接知覚によって、AはCと掲げられた紙コップに注意を向け、何らかの反応を起こすように自らの身体を調整することになる。しかし、実際にどのような反応を返すべきなのか、Cからの働きかけに対してAはどのような行為で同調すれば良いのかについては、これらの知覚可能な身体的レベルの情報だけでは明確にならない。こ

のようなCの非言語行動を「お湯を注ぐ」という活動の開始として意味づけるためには、当該発話の言語的意味、すなわち「お湯」を、その発話に伴い掲げられた紙コップをはじめ、その場に実在する様々な事物事象と関連づけることが必要となる。本質的にマルチモーダルな伝達行為である発話は、言語／非言語を問わず様々なモードによって表出される意味の総和、すなわちインターモーダルな情報への気づきが、活動の実践に関わる重要な機能を果たしている⁵。この意味で、発話が有する言語的側面と行為的側面は、各々異なるアプローチによって利用されるものの、同様に重要な情報源であり、多くの場合、その両者が多様に関連し合うことで活動の実践に貢献していると考えられるべきだろう。

また、〔お湯〕と〔紙コップ〕とが関連づけられることは、同時にその場のヒトとモノの位置関係を再認識させることにつながる。それにより、電気ケトルがAの側にあり、BやCからは手の届かない位置にあることや、AとCの距離が紙コップを受け渡すのにBの介入を必要としない程度に近いことなど、ある特定の仕方で「お湯を注ぐ」三項行為を達成する可能性に各参加者が気づくことになる。その可能性への気づきは、Cの紙コップが空になり、飲み物を作るためにお湯が必要になった状況で、まずCにもたらされる。しかし、その時その場の配置から考えて、Cは紙コップにお湯を注ぐために他の参加者と同調すること、少なくとも、Aとの間で同調的に三項行為を成立させる必要があった。つまり、何らかのモードで、今ここの状況が「お湯を注ぐ」活動のある特定の仕方で実現する環境であることを他の参加者にも気づかせる必要があったと考えられる。

語用論的な見方をすれば、次に何が起こるべきかという予測の基盤となるのは、コンテキストであると言えるだろう。しかし、Silverstein (1993: 36) によれば、生起する記号（出来事）がコンテキストに対してもつ関係性には前提的なものと創出的なものがある。発話を含むあらゆる出来事が、その時その場のコンテキストを前提として生起し、またその結果としてコンテキストの一部が変容し、新たなコンテキストが創出される。本稿が目指すヒトとモノの配置は、まさに出来事の生起の前提となり、その効果として変容し続けるマイクロ社会的／状況的コンテキストである。配置が変化するたびに、適切にコンテキストを更新しているかどうか、次なる出来事の適切な予測に繋がるものと考えられる。ただし、我々の会話活動は、常に多様な可能性に開かれており、次に起こりうる出来事が、必ずしも直前の出来事が創出したコンテキストを前提として生起するとは限らない。たとえば、(1)の事例では、「お湯を注ぐ」活動が開始される以前から参加者間で会話が行われており、その内容は「お湯を注ぐ」活動とは無関係であった。つまり「お湯を注ぐ」活動が前提とするコンテキストは、先行する「ケーキの名前

5 Stoffregen & Riccio (1988) は、複数の知覚システムへの刺激作用間には、不整合があるのではなく、調和があると考え、我々の行為（それが複雑なものになればなるほど）には、複数の知覚システムを駆使することで、環境の共変 (convariation) から抽出されるインターモーダル (intermodal) な情報が利用されていると述べている。

に関する会話」が創出するコ・テキスト (co-text) や認知効果⁶ とは無関係であることを意味する。「お湯を注ぐ」活動の前提的基盤となったのは、その場の環境、各ヒト／モノの現状やその配置である。Cはそうした環境を「お湯を注ぐ」活動の開始に値する環境として捉え直している。そして上述の通り、当該の活動が他者を巻き込む三項行為として実践される必要があるならば、他者においても同様の捉え直しがなされる必要がある。ある行為はある環境を前提とし、ある環境はある行為を可能にするといったように、行為と環境は互いを特定し合う関係にある (cf. 佐藤、2006)。発話という行為も当然、そうした行為の一種であると考えなければならない。(1)では、4行目のCの発話「お湯」が起点となって「お湯を注ぐ」活動が開始されているが、それは同時にAとBに対して、「お湯を注ぐ」活動を可能にする環境としてその場の配置を捉えなおすことを暗に要請している。ある活動の開始を意図する参加者のシンプルな一語発話が、他の参加者に対して、環境の配置をその活動に適したものとして捉え直させるきっかけとなっている。

4. 発話による活動の区別

前章での分析を通して、遂行フレーム、相互行為フレーム、三項行為フレームが多様に組み合わせられ、複数の活動が時に同時に、時に即座に切り替えられながら展開する会話の場のダイナミクスを概観し、こうした複雑な活動の成立（立ち上げ）にはその場のヒトとモノの配置や主体間で共有された知覚可能域でのモノの変化が関連していることを確認した。また、そうした会話のダイナミクスの中では、あるモノに言及するたった一語の発話がある活動の起点となり、参加者にとって、その場のヒトとモノの配置をその活動に適した環境として捉え直すきっかけとなりうる事が示唆された。

以下では、既に開始され並行している二つの活動を区別する上で、すなわち、「今自分がしていること」から他の活動を区別する上で発話が利用されている事例について分析し、環境の捉え直しを要請する発話についてさらに考察を進めていく。

4.1 活動の交錯に起因する混乱

(2)の事例は、グループII（参加者D、E、F、G）の会話である。ここでは、テーブルの上に二つの大きな紙皿があり、一つには、紅茶やココアなど、飲み物の各種インスタント粉が入ったスティック状の袋（以下、スティック）が10本ほど並べられており、もう一つには、3種類

6 ここで言う「認知効果 (cognitive effect)」とは、ある意図明示的な伝達行為（発話）が聴者の認知環境を何らかの形で更新させる効果のことである (Sperber & Wilson, 1995: 265-266)。お湯を注ぐ活動の起点に当たる事例(1)4行目の発話「お湯。」を動機づけるようなCの認知環境は、それ以前の発話が多量に認知効果によって更新され、形成されたものであるとは言い難い。

のクロワッサンを分けて入れた3つの紙袋（紙袋①②③）が置かれている。

(2)グループⅡ：ゴマ

- 01 G: (紙袋①に手を伸ばし) 何だろうね、
02 これ、($\rightarrow F$) ちょっと開けていい？
03 F: はい。あたし (ミルクのスティックを取って) ミルク飲みたいです。
04 E: [$(\rightarrow F \rightarrow \text{ミルクのスティック})$ おいしいよ。
05 D: [$(\rightarrow \text{ミルクのスティック})$
06 F: (ミルクのスティックを見ながら) ねこれ、いっぱい入ってますよねー。
07 [$\#\#$ 、一番多いの開けますか。($\rightarrow E$)
08 G: [(紙袋①を開けて) あ、チョコクロだ。(紙袋①をDの前に差し出しながら)
09 チョコ [クロだ。
10 E: [いや、いいよいいよ。(前に手を差し出して) 入れちゃって。
11 [(スティックが置かれた中央の皿を覗き込む)
12 F: [Dさん何から？
13 E: (皿の上を指さして) あ、二本あるよ。
14 F: [(軽くうなづく)
15 G: [(紙袋②を手に取り、中を覗き込む)
16 D: (目の前の紙袋①の中を覗き込む)
17 [(紙袋①をEに渡す)
18 G: [あこっちは、(紙袋②をFの前に差し出す) 普通のクロ [ワッサン。
19 E: [すごいですね。
20 F: [(紙袋②の中を覗き込む)
21 G: [すごい。(紙袋③を手に取り) これは ($\rightarrow E$) [何だと思いますか。
22 D: [クロワッサン ($\rightarrow \text{中央の皿}$)、
23 E: [$(\rightarrow \text{紙袋③})$ すこし考えるような様子)
24 F: [$(\rightarrow \text{紙袋③})$
25 D: [(中央の皿を指して) あたしチャイ、チャイがいい。
26 F: ($\rightarrow \text{中央の皿}$) チャイ [で。
27 E: [ゴマ。
28 D: ($\rightarrow E$) [$(\rightarrow \text{紙袋③})$
29 F: [$(\rightarrow E)$
30 D: ($\rightarrow F$)
31 F: (Eを指さしながら $\rightarrow D$) @@@ びっくりした@@、

- 32 〔Ⅲを指さしながら →Ⅲ〕 ゴマない、
33 D： 〔@@@@@@
34 F： (顔を上げて) 今ゴマないつつったのかと思った。

まず、1-7行目では、Gがテーブルの上に置かれた3つの紙袋のうち一つ(紙袋①)を手に取り、中身を確認しようとする(1行目)。その一方で、Fはその紙袋の隣に置かれていた飲み物のスティックを手取る(3行目)。ここで当該の場には、飲み物を巡る活動(Act-1)と食べ物を巡る活動(Act-2)の二種類の活動が同時に開始されているのがわかる(図6)。その後、4行目でEが、3行目のFの発話に反応し、Act-1はEF間で共創されていく。このAct-1のシーケンスは、6行目のFの発話から、10行目のEの発話へと継続されていくことになる。また、このときDもFの方(ミルクのスティック)に視線を向けているのが確認されるが(5行目)、この時点では特に目立った振る舞いはない。

一方、Act-2は、Gによって個別に進められるが、8行目で紙袋①の中身を確認したGは、それをDの目の前に差し出す(図7)。それを受け取ったDに対して、Act-1に参加するFが12行目で飲み物を選ぶように働きかけるが、DはGから受け取った紙袋①の中を覗き込み(16行目、図8)、続いて左隣のEにそれを渡しているため(17行目、図9)、このFの問いかけにすぐには答えない。このようにしてAct-1とAct-2は空間的に交錯していく。Gから徐々に紙袋①が回されていくことにより、16行目ではDが、17行目ではEがAct-2へと知覚を配分し、その後



図6：(2)7-8行目



図7：(2)8行目



図8：(2)16行目



図9：(2)18行目

Eが19行目で、Dが22行目で Act-2 に関する発話を行っている。

さらに、Gは15行目で二つ目の紙袋（紙袋②）の中身を確認し、それを18行目でFの前に差し出す(図9)。Fも20行目で紙袋②の中身を覗き込み、同じく Act-2 へ自らの知覚を配分しかけるが、まだ、D、Eのような発話による言及は観察されない。引き続き、Gは三つ目の紙袋（紙袋③）も手に取り、今度はEに向かって「これは何だと思いますか」と問いかける（21行目、図10）。これに対して、当然、Eは紙袋③の中身が何であるかを考える姿勢を見せ(23行目、図10)、同時にFも紙袋③に一瞬視線を向けている（24行目）。

以上、1-24行目の展開からも、先の事例(1)と同様に、各主体の知覚可能域におけるモノの変化が、会話の場の展開に影響を与えていると考えられる。つまり、各種のクロワッサンが入っている三つの紙袋が、Gの振る舞い（8行目、15行目、21行目）によって他の参与者の知覚を促し、それらが参与者間を移動することで、いくつかの行為（「中身を確認する」「受け渡す」「匂いを嗅ぐ」など）の可能性が会話の場に均等に広められていく。D、E、Fにとっては、飲み物のスティックが専ら知覚の対象として取り立てられていた場に紙袋が侵入してくことで、それぞれ異なる活動へと志向する複数の行為の可能性が入り交じる状況となり、ここに活動の交錯が起こるわけである。

こうしたモノの配置替えに起因する活動の交錯は、続いて参与者間に一時的な混乱をもたらす。(1)における「会話」と「お湯を注ぐ活動」の並行とは異なり、この Act-1 と Act-2 の並行を「交錯」と呼べるのは、それが以下に述べるような認識的な混乱を誘発しうる事物の配置（替え）を伴う並行だからである。23-24行目でEとFが視線を紙袋③に向けるのと同時に、22行目で一瞬 Act-2 へと傾いていたはずのDは、飲み物のスティックが並ぶ中央の皿を指して「あたしチャイ、チャイがいい」と発話し、突如 Act-1 へと知覚の志向を切り替える(25行目、図11)。これに合わせてFは一瞬にして Act-1 へと自らの知覚を戻し、Dの希望を発話で確認している（26行目、図11）。

一方、21行目のGの問いかけに対して返答する態勢にあったEは、26行目のFの発話とほぼ同時に「ゴマ」と発話する（27行目）。これは、21行目のGの問いかけに返答するものであるが、これに対してDとFは驚いたような反応を見せる。その理由を、本稿では次のように分析する。



図10：(2)21-23行目



図11：(2)25-26行目

まず、21行目の問いかけに重複して、Dは「クロワッサン」(22行目、おそらくこの発話は、19行目や21行目に行われている評価的な発話「すごい」に歩調を合わせた相づちのような発話であると考えられる)と発話しながら、既に飲み物のスティックが並んでいる中央の皿に視線を向けている。また、本来ならばGの問いかけに対する返答が入りうる位置(25行目)で、飲み物に言及する発話を行っている。これらの事実から考えて、21行目のGの問いかけは、Dの希薄な意識下に存在している可能性が高い。また、このDの25行目の発話に即座に反応したFも同様にこのGの問いかけに対する意識は希薄であったものと推測される。そのためDとFは、27行目のEの「ゴマ」という発話がGの「これは何だと思いますか」(21行目)という問いかけに対する答えであるとは一瞬気づかず、飲み物に言及する発話だと勘違いしたものと考えられる。これについては、28-34行目の振る舞いからも確認できる。Eの「ゴマ」という発話が食べ物だけではなく、飲み物にも関連づけることが可能なものであったために、DとFはそのEの発話を、自分たちが専ら〔知覚-行為〕を向けている Act-1 のシーケンスに埋め込み理解しようとしたのである。

4.2 間主観性を基盤とする混乱の解消

本稿では、(2)の27-39行目の「混乱」と言うべき事態が、D・FとEとの間で適切に「間主観性(intersubjectivity)」が発揮されていなかったことに起因するものと考えられる。Duranti (2010)によれば、間主観性とは相手にも自分と同じように周囲の環境が見えているという状況、すなわち「相手が今の自分と同じ場に立てば、相手にも周囲の環境が今の自分と同じように見える」という「場の交換⁷(trading places/place exchange)」の可能性に深く関連している(ibid.: 6)。こうした見解は、Gibson (1979/1986: 21)における「観察点(a point of observation)」の公共性に関する記述と合致するものであり、生態心理学においても理論的に支持されるものである(cf. 本多、2005; 宮崎・上野、1985/2008)。つまり、「今、誰がどこから何を見ている(知覚している)のか」というその時その場の知覚主体(ヒト)と知覚対象(モノ)との位置関係を把握することが、その時その場の相互行為／三項行為に適した間主観性を有効な状態にすること(activation)に関連しているものと考えられる⁸。前節の観察と分析から明らかなように、当該時点でのD・FとEとでは、そもそも見ているものが異なり、また志向する活動も異なる。そのため両者が知覚する行為の可能性も、ひいては周囲の環境に対する認識も異なっているのである。前章で述べた通り、モノの配置の変化は、その場の行為フレームの変化に関連している。Gによる紙袋の振り分けは、D、E、Fが当初志向していた飲み物のスティックを接点と

7 片岡(2011)による和訳。

8 詳しくは、現象学者E. フッサールの概念を人類学的視点から捉えなおした Duranti による一連の研究(Duranti, 2009; 2010)を参照。

する三項行為フレーム（Act-1）から、紙袋を接点とする三項行為フレーム（Act-2）へと切り替える可能性を会話の場にもたらした。その可能性に乗じて、Eは〔E-紙袋③-G〕という三項行為フレームへと志向を切り替え、27行目の発話を行なっている。そしてこの発話に対するD、Fの驚きは、その時点では両者が〔D-スティック-F〕という三項行為フレーム内にあり、Eと同様の紙袋③を接点とする三項行為フレーム内にはなかったことを示すものと考えられる。しかし、27行目のEの発話に対して、Dは驚いたようにEに視線を向けたあと、すぐにGの手元にある紙袋③を見る（28行目、図12-13）。それにわずかに遅れて、FもEに視線を向けている（29行目、図13）。その直後に、Fは笑いながら当該の発話がAct-1ではなく、Act-2のシーケンスに埋め込み理解すべき発話であったことを確認する。

D・Fによる以上のような視線の動きは、「今、誰がどこから何を見ているのか」という知覚主体(E)と知覚対象（紙袋③）との切り結びを把握し直そうとする振る舞いであると考えられ、そうした過程の末に、D・FはEによる27行目の発話を適切に意味づけることに成功した。つまり、この時Eが志向していた活動のフレームが〔E-スティック-D/F〕ではなく、〔E-紙袋③-G〕であったことにDとFが気づいたことを意味している。

既述の通り、我々の活動はモノの配置をはじめとする動的な環境を前提に構築されるものであり、行為と環境は互いを特定し合う関係にある。(2)の27行目の発話に対してD・Fが見せた驚きは、その発話から特定される環境が、D・Fには見えていなかったことを意味している。そもそも27行目の時点でEが志向する活動のフレーム〔E-紙袋③-G〕には、28-29行目でそのフレームを捉え直すDやFが項として含まれていない。そのため、両者はEの活動に適切な環境を特定するために、Eの立場から改めて環境を見直さなければならない。すなわち、間主観性に基づく環境の捉え直しが必要となる。34行目の「ゴマ」という一語発話は、単にGによる27行目の質問に対する答えとしてだけではなく、DとFに対しても、今Eが何をしているのか、それはD・Fの活動に関連するものかどうかを把握するために周囲の環境を捉え直すきっかけとなっていると言える。

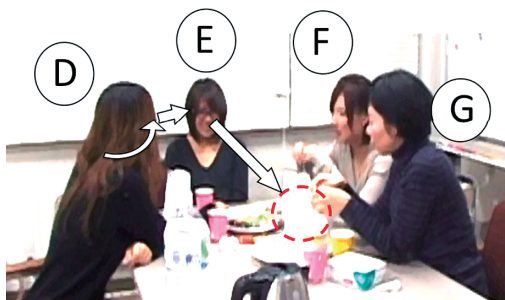


図12：(2)28行目



図13：(2)28-29行目

5. 語用論的考察：一語発話の可能性

第3章、第4章での分析によって（一語）発話の効果、すなわち、ある活動に適した環境としてその場のヒトとモノの配置を捉え直すきっかけとなりうることについて論じてきた。事例(1)の4行目では「お湯」という発話（以下、【お湯】）を、そして事例(2)の27行目では「ゴマ」という一語発話（以下、【ゴマ】）を取り上げたが、本章では、ここまでの分析をもとに発話という行為が持つ相互行為（三項行為）上の意味機能について語用論的な考察を試みる。

まず【お湯】と【ゴマ】には次のような相違点がある。【お湯】はある活動の開始に伴う発話であり、この【お湯】をきっかけに、参与者A、Bは発話者Cが「これからすること」にどのように同調すべきかを、その時その場の環境を捉え直すことで知ることになる。それに加え、【ゴマ】は現行の活動（例えば Act-1）に近接し並行する他の活動（例えば Act-2）の存在を再認識することにも寄与している。この【ゴマ】をきっかけに、参与者D、Fは自分たちが専ら志向する活動とは別の活動がどのように進行しているのかを十分に把握し切れていなかったことを知り、また、【ゴマ】が埋め込まれるべき活動のシーケンスを探すために、その時その場の環境を捉え直すことになる。

一方、【お湯】と【ゴマ】の共通点は、共に名詞一語によって、あるモノに言及する発話であること、それにも関わらず、周囲のヒトとモノの配置を何らかの活動の実践に適切な環境として捉え直すという俯瞰的／大局的な視点への切り替えを参与者に要請する効果をもつということである。ただし、それぞれの発話者が、この効果を意図して当該の発話を行っているとは考えにくい。本稿において再三述べてきたが、そもそも発話という行為は、環境に特定のなものであり、あらゆる発話が、それが適切に許容されうるその場の捉え方を常に暗示していると考えべきだろう。つまり、発話者の意図とは無関係に、すべての発話が常に環境の捉え直しに利用可能な状態で繰り出されているということになる。

Searle (1979) の「間接発話行為 (indirect speech act)」、ないし Grice (1975) や Sperber & Wilson (1995) などで議論している「含意 (implicature)」について、本稿のアプローチから再考してみると、そもそもそうした言外の意味は、文字通り発話が有するものではなく、その場の環境が備える潜在的な行為の可能性にほかならない。たとえば、発話行為理論に則して、「この部屋暑いね」という発話が他者に窓を開けさせる結果となるような例を考えてみよう。「この部屋暑いね」という発話行為は、「この部屋が暑い」という命題を陳述する発語内行為を為すが、その場のコンテクストとの兼ね合いによって、その発話には「窓をあけてほしい」という依頼の効力 (illocutionary force) が生まれ、相手に「窓を開ける」という発語媒介行為を実践させると考えることになるだろう。これを本稿の立場から語り直すなら、「この部屋暑いね」という発話の発語内には、やはり陳述の機能しかなく、依頼の効力はない。当該の発話が何らかの効力を持つとすれば、それは部屋の暑さに言及する陳述であるがゆえに、「暑さという問題

を抱えた部屋」として周囲の環境を捉えなおすきっかけを他者に与えるといったものだろう。その発話を聞いた他者が結果として窓を開けたなら、それは暑い部屋として認識された環境を改善する具体的な方法として、その他者が「窓を開ける」という可能性に気づいたからにほかならない。つまり、「含意」とは、発語内にあるのではなく、環境の中に潜在的に備わっているものであり、本質的には発話者の意図とは無関係に、環境を知覚する主体の知覚力によって導出されるものと考えるべきである⁹。

上述のような旧套の発話行為理論を批判的に捉え、新たに「語用実践行為 (pragmatic act)」の理論を提唱した Mey (2001) には、本稿の見解を支持する次のような記述が見られる。

状況によってアフォードされる（つまり、使用実践に向けて与えられている）諸可能性—— よって、この諸可能性をギブソンは、「アフォーダンス」と呼ぶ (Gibson 1979) —— にしたがって、認識の対象物体を、能動的な（活動的な）認識範疇と一緒にあって創り出すのは、状況なのである。

…コミュニケーションのために言語を使う時、私達が理解できる（そして実際に理解する）ものは、私達が聞くようにアフォードされた（つまり、状況によって「立ち上げ」られた）ものであるという結論になる。「結論に飛び付くこと [jumping to conclusions]」、
「帰納的思考 [inductive thinking]」、(フランス人によると、良き聞き手がそれだけで満足するような) 婉曲語 [demi-mot]、言語的なほのめかし、間接的な発話による行為、これらすべては、このような「状況づけられたアフォーダンス」を示す事例である。(小山沢、pp. 331-332)

同書による語用実践行為の説明は、「発話者と聞き手双方が彼らのアフォーダンスを賦与される環境状況に置かれており、その状況全体が、そこで何が言えるのか、そしてそこで何が実際に言われているのかを制約する」というように「外から内へと展開する」(小山沢、p. 332)。「アフォーダンス (affordance)」とは、「直接知覚」と同様に生態心理学における主要概念の一つであり、Gibson (1979/1986) によれば、環境やそこに存在する種々のモノ (対象/object) が、その環境の中で動く主体との関係において潜在的に備える可能性や機会のすべてを指す (ibid.: 21)。上記 Mey の記述によれば、事例(1)の【お湯】という発話は、既にその場の環境にある「お湯を注ぐ」三項行為のアフォーダンスによって、どう理解されるかが決められているということになる。問題は、そのアフォーダンスに我々がその時既に気づいているか、もしくは、その時即座に知覚することができるかということである。事例(1)の【お湯】は、その場

9 最終的には「受け手の反応が発話の効力を決定づける」という uptake (Austin, 1962) について、本稿と同様に具体的な会話事例の分析を通して質的、経験的に検証した名塩・水島 (2010) も参照。

に起こりうる（その場がアフォードする）活動の開始として即座に理解されているが、事例(2)の【ゴマ】は、参与者間に一時の混乱をもたらしている。この混乱は、実際の会話の場には複数の活動が交錯する可能性があり、そうした場面では、ある行為の意味を、限られているとはいえず一つではない可能性から探し出す、すなわち、その行為を埋め込むべき活動のシーケンスを探し出すという手続きが必要となることを意味している¹⁰。我々は、周囲の環境が備えるアフォードダンスによって力づけられ限界づけられる存在でありながら、その環境が備えるアフォードダンスの多様性により複数の可能性に開かれた自由な存在でもある。発話は、常に我々が周囲の環境との間にどのような限界と自由度を持つかに応じて機能し、また常にその限界と自由度を我々に再認識させるものであると言えるだろう。

6. まとめ、および、今後の課題

以上、本稿では、具体的な会話事例を通して、会話の場における相互（三項）行為の実現に発話がどのように、どの程度貢献しているかを分析、考察してきた。三項行為における行為フレームの切り替えや組み替えは、その時その場の環境、特にヒトとモノの配置に深く関連し、各参与者の知覚可能域でモノが多様に変化することが、各参与者に対して特定の行為を可能にし、それらの可能性が動的に接続、融合することで特定の相互（三項）行為の実現を可能にしている。換言すれば、各行為の効果によってヒトとモノの位置関係が次なる行為に適切な配置へと変容していく。本稿の第3章と第4章では、環境が可能にする行為によって生み出された新たな環境が次なる行為を可能にし、そうした〔知覚-行為〕サイクルの間主観的・相互主体的な組織化によって、一つの複雑な活動が達成されていることを示した。

このようなある活動の実現に向けた〔知覚-行為〕サイクルの組織化に、発話はどのように機能しているのか。第3章では、活動の起点でその開始を宣言する一語発話に、そして第4章では、その場で並行する二つの活動のうち、一方のシーケンスに埋め込まれた、具体的には質問に対する答えに当たる一語発話に焦点を当てて、それらが各会話活動の場にもたらす効果について検討した。その結果、両発話ともに共通して、周囲のヒトとモノの配置を何らかの活動の実践に適切な環境として捉え直すという俯瞰的／大局的な態度への切り替えを参与者に要請する効果をもつという可能性が示唆された。

さらに、第5章では、本稿での議論と近年の語用論的な知見との整合性について考察した。本稿での議論に基づけば、ある発話に次いである行為が成立する場合でも、その発話は直接行為の成立を支えているわけではなく、単にその可能性に言及しているに過ぎない。そうした言

10 その場で並行する、もしくは先行するシーケンスを、ある行為を意味づける枠組み(interpretative framework)として選び出す Search sequence については、Goodwin (1995; 2002)を参照。

及が相手に特定の行為を予期させ、その相手はその行為を行う態度で環境を捉え直すことになる。つまり、行為の成立を直接支えるのは、あくまでその場の状況／環境であり、発話はその状況／環境を適切に捉え直すきっかけになっていると言うべきだろう。この見解は特に Mey (2001) での「語用実践行為」に関する記述との整合性が高く、本稿における具体的な事例の経験的／微視的な分析と考察が、Mey (2001) の主張を論証する結果となった。

本稿で分析の対象となった会話では、多種多様なモノが配置された環境が参与者間で直接共有されていた。しかし、例えば、電話での会話や立ち話、SNS の利用など、日常的なコミュニケーションが必ずしもそうした状況で行われるわけではない。少なくとも本稿で見てきたよりも、さらに言語が果たす役割は重要なものになるに違いない。今後の課題としては、言語的な情報をもとに創出される環境と各参与者の振る舞いとに関連について、新たなデータを用いつつ議論することも必要となるだろう。また、一部言及するに留まったが、Mey (2001) ではヒトやモノを含む（本稿で言うところの）環境を特定の会話活動の場として状況づけるよりマクロな社会が想定されているが、本稿での議論では、そうしたマクロ社会文化的な要素を明確に見出すには至らなかった。しかし、Mey が述べるように、ヒトがいかなる活動に参加する際にも常に社会によって力づけられ限界づけられた存在であるならば、我々の認識も〔知覚-行為〕も、ひいてはその対象となる事物事象にも一種の社会性を認めることが可能となるはずである。本稿での微視的な事例分析は、個々の事象からボトムアップに活動の体系を辿った先に各主体に固有の社会性を含む認知的基盤を想定して行われた。この認知的基盤は、よりマクロな社会学的視点からはどのように捉えられるのだろうか。そもそも Mey (2001) が述べる「状況づけ」とは、何をもってどのように実現されるのか。この問題については、例えば認知科学、特に比較文化心理学において盛んに議論されているところである（波多野・高橋、2004）。社会文化的な規範や慣習が我々の日常的な活動を組織化するという、これまで当たり前のように思われてきた枠組みの再考と精緻化を、本稿でも今後の課題の一つとして挙げておきたい。

【参考文献】

- Austin, John L. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- Duranti, Alessandro (ed.) (2004). *A Companion to Linguistic Anthropology*. Malden: Blackwell.
- Duranti, Alessandro (2009). The Relevance of Husserl's Theory to Language Socialization. *Journal of Linguistic Anthropology*, 19(2), 205-226.
- Duranti, Alessandro (2010). Husserl, Intersubjectivity and Anthropology. *Anthropological Theory*, 10(1), 1-20.
- Gibson, Eleanor J. (1994). Has Psychology a Future? *Psychological Science*, 5, 69-76.
- Gibson, James J. (1953). A Theory of Pictorial Perception. *Audio-Visual Communication Review*, 1, 3-23.
- Gibson, James J. (1966/1983). *The Senses Considered as Perceptual Systems*. Westport: Greenwood Press.
- Gibson, James J. (1967). New Reasons for Realism. *Synthese*, 17, 162-172.
- Gibson, James J. (1968-1969). Are There Sensory Qualities of Objects? *Synthese*, 19, 408-409.

- Gibson, James J. (1979/1986). *The Ecological Approach to Visual Perception*. New York: Psychology Press.
(古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬受訳 (1985)。生態学的視覚論 サイエンス社)
- Goodwin, Charles (1995). Co-constructing Meaning in Conversations with an Aphasic Man. *Research on Language and Social Interaction*, 28(3), 233-260.
- Goodwin, Charles (2002). Conversational Frameworks for the Accomplishment of Meaning in Aphasia. In Goodwin Charles (Ed.), *Conversation and Brain Damage*. Oxford: Oxford University Press, pp. 90-116.
- Grice, Herbert P. (1975). Logic and Conversation. In Cole, Peter, & Morgan, Jerry L. (Eds.), *Syntax and Semantics*, 3, New York: Academic Press, pp. 41-58.
- 波多野誼余夫・高橋恵子 (2004)。文化と認知：心の理論をめぐる 大津由紀雄・波多野誼余夫 (編) 認知科学への招待 研究社 pp. 174-187。
- 本多啓 (2005)。アフォーダンスの認知意味論 —— 生態心理学から見た文法現象 東京大学出版会。
- 片岡邦好 (2011)。間主観性とマルチモダリティ —— 直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について —— 社会言語科学, 14(1)、61-81。
- Mey, Jacob L. (2001). *Pragmatics: An Introduction*. Malden: Blackwell. (小山亘訳 (2005)。批判的社会語用論入門 —— 社会と文化の言語 三元社)
- 三嶋博之 (2000)。エコロジカル・マインド：知性と環境をつなぐ心理学 日本放送出版協会。
- 三嶋博之 (2001)。形なきかたち —— 「複合不変項」の知覚：〈ひも〉の知覚を題材として 佐々木正人・三嶋博之 (編) アフォーダンスと行為 金子書房 pp. 131-161。
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985/2008)。視点 東京大学出版会。
- 名塩征史・水島梨紗 (2011)。相互行為における発話の効力を再考する —— 社会による限定と参与者による決定 —— 社会言語科学, 13(2)、46-58。
- Reed, Edward S. (1996). *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford: Oxford University Press. (細田直哉訳 (2000)。アフォーダンスの心理学 —— 生態心理学への道 新曜社)
- 佐藤由紀 (2006)。一人芝居の身体 —— イッセー尾形の一分間 —— 佐々木正人 (編) アート／表現する身体：アフォーダンスの現場 東京大学出版会 pp. 55-74。
- Searle, John R. (1979). *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press. (山田友幸訳 (2006)。表現と意味 —— 言語行為論研究 誠信書房)
- Silverstein, Michael (1993). Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In Lucy, John A. (Ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge University Press, pp. 33-58. (小山亘・榎本剛士・古山宣洋・永井那和訳 (2009)。記号の思想：現代言語人類学の一軌跡 —— マイケル・シルヴァスティン論文集 三元社 pp. 473-537)
- Sperber, Dan, & Wilson, Deirdre (1995). *Relevance -Communication and Cognition, 2nd ed.*. Oxford: Blackwell.
- Stoffregen, Thomas A., & Riccio, Gary E. (1988). An Ecological Theory of Orientation and the Vestibular System. *Psychological Review*, 95(1), 3-14.
- 鈴木健太郎 (2001)。行為の推移に存在する淀み —— マイクロスリップ 佐々木正人・三嶋博之 (編) アフォーダンスと行為 金子書房 pp. 47-84。
- 鈴木宏昭 (2004)。創発認知から見た問題解決 大津由紀雄・波多野誼余夫 (編) 認知科学への招待 研究社 pp. 46-61。
- Swenson, Rodney, & Turvey, Michael T. (1991). Thermodynamic Reasons for Perception-Action Cycles. *Ecological Psychology*, 3(4), 317-348.
- Turvey, Michael T. (1996). Dynamic Touch. *American Psychologist*, 51(11), 1134-1152.

【付録】

トランスクリプトの中で使用される表記凡例

[	発話や非言語的な振る舞いの重なりが始まる時点
(斜体)	非言語的な振る舞いに関する筆者のメモ
→	視線の向き（「→X」は「Xへ視線を向ける」）
(数字)	沈黙の期間：1秒単位
、	発話が続く音声的な区切り（一秒未満の短いポーズを含む）
。	発話が終わる音声的な区切り
—	音の伸ばし（相対的に際立つ長さでない限りは一つで表記）
？	上昇調のイントネーション
{ }	差し挟まれた発話（主に相づち）
#	聞き取り困難な発話
@	笑い声

（2013年6月4日受理、2013年8月5日最終原稿受理）

《SUMMARY》

One-word Utterances Leading to our Rediscovery of
the Surrounding Conditions of Particular Actions
—— Utterances in terms of a [Perception—Action] cycle ——

Seiji NASHIO

This study focuses on some situations in which 3-4 participants performed conversational activities, and analyzes scenes during which an activity based on the locations of the participants and things on that occasion began to take shape following a one-word utterance.

Analyses from a perspective of ecological psychology revealed the following. 1) The participants are situated (restricted/empowered) with the surrounding condition that consists of things and persons. They must adjust their actions to its changes even if the actions are independent of the conversation which progresses in parallel. 2) At the beginning of some of the actions, one-word utterances are observed, which can be triggers to enable our rediscovery of the surrounding conditions suited to each of those actions. 3) This particular kind of utterance can also contribute to the resolution of cognitive confusion caused by the crossing of two activities.

The significance of these findings is discussed in terms of concepts on pragmatics, especially ‘pragmatic acts’ as advocated by J. L. Mey who correlated a concept ‘affordance’ in ecological psychology to arguments about speech acts in pragmatics.